

第6部 博物館の諸問題

第1章 「少子高齢化時代に求められる新しい手法の開発」に関する検討

戸田 孝・榊永 一宏（滋賀県立琵琶湖博物館）

概要

博物館において従来は低年齢層を主な対象としてきた、ハンズオン展示や学校連携などの事業手法を、高年齢層に対しても展開していくことが昨今の課題となっている。そこで、欧米豪における先進事例や近隣諸国の実情を現地調査した。その結果、先進事例では対象の年齢層を多様に想定して各々を意識して事業展開している事例が多かった。また、近隣諸国では現状の展示手法等が古典的などころでも現場は新しい手法に興味を示すことが少なくなく、潜在的な発展の可能性が認められた。

キーワード 高齢者層への対応、欧米豪の先進事例、近隣諸国の状況

1 はじめに

全国の博物館の間における共通の問題として、大人の日常的な利用者が少ないということがある。学齢児童は学校行事の一環として博物館を訪れることが多いし、その際に経験したことを再体験したい、あるいは不十分に感じたことを深めたいという動機で、家族連れで再訪するという行動も見受けられる。学校行事とは別に家族旅行で博物館を訪れるというのも、ごく普通の行動である。このような小学生以下の低年齢層やその家族層に比べて、大人の利用者に対する吸引力が相対的に低いというのは、博物館全体の共通理解といえるであろう。

一口に大人の利用者といっても、中学生～大学生層、若者層、勤労者層、主婦層、退職者層など各種の利用者層が考えられ、各々を想定した対応策には共通する内容はもちろんあるが同一ではないと考えられる。ここでは、その中で特に定年退職者層を中心とする高齢者層への対応に注目して論ずる。

高齢者層への対応は、いわゆる「少子高齢化」問題への対策の一環として社会的に注目されている。これは、我が国の人口構成が急激に高齢化する中で、これまで低年齢層を主な対象として実践されてきた事業を、高齢者層を対象とするものへとシフトしていかなければならないということである。これは公共的な社会教育事業に限ったことではなく、例えば通信教育などの形で営利企業として教育活動を行ってきた民間の業界も、高齢者層を対象とする事業への展開を積極的に進めている傾向が顕著である。

博物館においては、従来は低年齢層を主な対象としてきた、ハンズオン展示等の手法や学校等との連携活動の試みを、高等教育や生涯学習の対象である高年齢層に拡大していく必要が生じてきている。この試みは国内においても種々進められているところであるが、本研究では国内とは条件の異なる海外の事例に目を向け、それらと国内の状況とを比較することによって、状況を客観的に把握することを目標とする。

このような場合、通常は「先進事例」に着目した調査を主体とすることが多いが、それと併せて「先進的」でない場所、特に今後の進展に際して共同歩調をとる可能性が考えられる隣国の実情も調査しておく必要があるだろう。そこで本研究では、欧米豪の先進事例と併せて近隣諸国の状況も調査することとした。具体的な対象は、琵琶湖博物館の諸事業での関わりなどの条件から、下記を選定した。

先進事例

イギリス・オーストラリア・アメリカ合衆国

近隣諸国

香港・ロシア（シベリア地域）・韓国・中国

2 欧米の先進事例

(1) イギリス

訪問日：2011年11月19日～2012年2月6日

訪問先：大英自然史博物館および近郊の博物館多数

訪問者：榊永 一宏

イギリスでの調査結果については榊永(2012)で既に報告しているの、ここではその概要を述べる。

① 大英自然史博物館ダーウィンセンター

大英自然史博物館は大英博物館の自然史部門が分離独立する形で1881年に設立された。ダーウィンセンターはその開館以来の大規模リニューアルとして建設されたものである。これには収蔵庫の大規模増設という意味もあるが、それと併せて「サイエンスコミュニケーション」という理念を打ち出している。即ち、博物館の舞台裏である収蔵庫を積極的に公開し、来館者と博物館とをつなぐ双方向性の展示をも目指している。

第1期工事で2002年に完成した液浸収蔵庫は1階部分の壁がガラス張りになっていて、常に収蔵庫の様子が見学できるようになっている。また、見学ツアーが毎日おこなわれている。第2期工事で2009年に完成した「コクーン」は展示室と乾燥標本の収蔵庫が一体化した建物である。中心部分が収蔵庫になっており、コクーン全体もガラス張りの建物の中に収まっている。最上階にエレベーターで上がり、収蔵庫の周りを緩やかなスロープを降りながら見学するようになっている。標本整理をするガラス張りの部屋もあり、化石クリーニングなどの標本整理作業を間近に見学できる。野外調査の様子について学芸員が自ら撮影したビデオを鑑賞できるコーナーもあり、標本を収集整理する意義なども解りやすく映像で解説している。

ダーウィンセンターの1階にあるアッテンボロースタジオでは、学芸員が映像や標本を使って来館者と交流するネイチャーライブと称するイベントが毎日行われている。このイベントにはホストと呼ばれる専任の司会が居て、来館者と学芸員の橋渡しをしている。



写真1 大英自然史博物館ダーウィンセンターの状況（窓から見える実験室、アッテンボロースタジオ）

② 最近のイギリスの博物館事情

イギリスでは保守党から労働党への政権交替に伴う政府補助金の復活（2001年）により、有料化されていた博物館が再び無料となる例が多くあった。その結果、無料化された施設への入館者数が2倍以上となる効果があったが、その一方で博物館が入館者数と来館者サービスを強く意識するようになった。例えば、休館日はクリスマス休暇の3日間のみという館も多いし、家族連れを対象とした館内のアクティビティが毎日のように多数行われている。学校団体を対象にワークシートやワークショップ、家族向けにバックパックを用意するなどの活動の結果、昼間の館内は子どもたちであふれかえっている。その一方で金曜日などに遅い時間まで開館する大人向けのイベントも行われており、展示室内でワインや食事が提供されたり、コンサートなどが開催される事例もある。

政府補助金以外の資金を獲得する努力も積極的に行われており、募金箱に思わず募金したくなるような仕掛けが施されていたり、目玉展示がライトアップされて募金者の名前が表示されるような仕掛けもある。貸館事業にも積極的で、企業のパーティーが頻繁に展示室内で行われているほか、子どもの誕生日パーティーのための利用も勧められていた。

西暦2000年の「ミレニアム事業」によって多くの館でリニューアルが行われており、その中でハンズオ

ン展示の組み込み、液晶プロジェクターの多用、タッチパネル式モニターの設置などが共通してみられる。ミュージアムショップやレストラン・カフェの新增設も多く、友の会への入会特典として専用のカフェやイベントを準備する事例もみられた。

(2) オーストラリア

訪問日：2013年12月2日～7日

訪問先：オーストラリア博物館（シドニー）、メルボルン博物館（メルボルン）

訪問者：梶永 一宏

オーストラリアでの調査結果については梶永(2014)で既に報告しているので、ここではその概要を述べる。

① オーストラリア博物館

オーストラリア博物館は1827年に設立され、動物、植物、骨格、鉱物、恐竜、アボリジニー文化などの展示室があるオーストラリア最古の博物館である。今回の調査対象は、「Search & Discover」という展示室である。1994年に整備され、博物館資料のハンズオン体験、利用者への博物館資料についての情報提供や、調べたいことの手助けをする部屋である。展示室の入り口には、常勤、非常勤、ボランティアのスタッフが配置されたカウンターがあり、博物館利用者への窓口機能を果たしている。ここでは、来訪者との対面での対応をはじめ、電話、メール、郵送などの様々な方法での質問（標本の同定を含む）に対応している。

館内の有料空間にあり、2012年の利用者は365,973人（入館者の約8割）であった。展示室の広さは220㎡で、バックヤードがさらに60㎡ある。この展示物は、標本（剥製、骨格、液浸）が豊富に、いたる所にハンズオン展示されており、利用者はそれらを手に取って、間近に観察することができるようにされていた。このように、博物館の収蔵資料を間近で見られ、本物の美しさや形が観察できることが大人に受け入れられる展示の要素であるようであった。また、標本のすぐそばには生きたトカゲ、エビ、カエル、昆虫、クモ等の生体展示もされていた。乾燥標本と生体を見比べることにより、生き物の動き方や体色などの理解が進むようである。この生態展示の世話は、ボランティアがバックヤードで担当していた。生き物の健康状態もすばらしく、ボランティアの手助けが重要であるとのことだった。室内にはボランティアが行っているオーストラリアの自然の多様性に関する調査活動呼びかける展示コーナーもあった。

この「Search & Discover」と同じフロアの近いところに、小さな子ども（5歳未満）専用の「Kidspace」という展示室があった。「Search & Discover」と同様に、昆虫の標本や動物の剥製やカエルなどの生体展示がある一方、ぬいぐるみや絵本などがあり、小さい子どもの利用に安全な柔らかな素材で出来たもので構成されていた。さらに小さい赤ちゃんを対象とした「Crawling babies only」というコーナーも部屋の一角にあった。このように、「Search & Discover」での利用は難しいが、幼児でも楽しめる部屋を別に設置し、利用者の年齢層に対して細かい配慮することにより、大人も子どもも、ゆっくりと落ち着いて、それぞれの展示を楽しめるとのことであった。



写真3 オーストラリア博物館の状況（Search & Discover）

② メルボルン博物館

メルボルン博物館は、南半球最大規模の博物館であり、動物、植物、化石、鉱物、恐竜、アボリジニー文化、メルボルン市の歴史などが展示されている総合博物館である。今回の調査対象は、「Discover Center」という展示室である。2000年に整備され、無料空間に位置している。特に入室者をカウントしていないが、おおよそ全体の入館者の10%が訪れているとのことであった。

この展示室は、博物館の研究、資料、専門知識を市民に提供することをミッションとしている。特に、利用者自身の研究を促進させることを重要な方針としている。設置の段階から大人を対象とした空間に意識されており、顕微鏡をみるテーブルも子どもの高さではなく、大人の高さに決められている。

展示室の広さは344㎡である(40人収容のセミナー室を含む)。展示物は、剥製、液浸標本、昆虫標本、貝、骨、化石、鉱物、民具などがあり、地域の人が身近な自然や文化について自分で調べられるように展示されていた。ボランティアが展示パネルや展示物の更新をしていた。室内のカウンター窓口には2人が配置され、博物館と外部との窓口機能を果たしていた。質問(対面、ネット、郵送、電話)や、同定、寄付、資料閲覧、調査、画像の利用等に対応していた。このスタッフは学芸員ではなく、博物館への質問をスクリーニングして、質問全体の60%ほどに回答し、専門知識が必要な40%の質問学芸員に回しているそうである。質問はすべてパソコン内でのデータベースで管理され、スタッフが共有できるようになっていた。

この「Discover Center」とは別に、3～8歳までの子ども専用の展示室「Children's Gallery」が有料空間に併設されていた。巨大な室内スペースの他に、室外には遊具も設置されていた。この展示室には、動物のぬいぐるみや大きな模型もあったが、実物の標本も展示されていて、その標本の鳴き声も聞けるしかけになっている。エビなどの液浸標本についても、模型とともに実物標本が発生の段階ごとの標本があるなど、決して子どもだましの展示ではなく、大人も見入ってしまう展示であった。



写真4 メルボルン博物館の状況 (Discover Center)

(3) アメリカ合衆国

訪問日(予定): 2016年1月13日～31日

訪問先(予定): フィールド自然史博物館(シカゴ)、アメリカ自然史博物館(ニューヨーク)、国立自然史博物館(ワシントンDC)、カリフォルニア科学アカデミー(サンフランシスコ)

訪問者(予定): 榊永一宏

アメリカ合衆国の調査は、本報告書の印刷発行には間に合わない予定であるので、ここでは計画している訪問先を記載した。なお、この調査の終了後、その結果を含む本論文の改訂版を、本報告書のインターネット公開と同じサイトにて公開する予定である。

3 近隣諸国の状況

(1) 香港

訪問日: 2013年12月9日～12日

訪問先：マイポ自然保護区， ウェットランド・パーク

訪問者：梶永 一宏

香港での調査結果については梶永(2014)で既に報告しているので、ここではその概要を述べる。

① マイポ自然保護区

マイポ自然保護区は、1983年に設置された、国際的重要な沼地や干潟が存在する377haもある保護区である。周辺の湿地を含めると1,500haに及ぶ広大な敷地である。この自然保護区への入場には事前予約が必要で、スタッフが保護区内を案内するツアーのみで公開されている。これは、保護区の考え方を確実に伝えるため最も効果的な方法であるという理由によるとのことである。また、事前予約には保護区自体の自然保護・保全のための入場者数制限の意味もあるとのことであった。学校団体向けには水曜日を除く平日に、一般向けには週末と祭日には3時間のツアーが1日に6回開催されている。2011年7月～2012年6月にかけての入場者数は26,308人であった。

環境保全、環境教育とともに、伝統的漁業の保全にも力を入れている。香港での伝統漁業として、土手で区切った Gei wai (浅い池) でエビなどを養殖するものがあるが、この保護区にあるものが残された最後である。Gei wai は鳥の重要な休息地にもなっており、この自然との共存のあり方について、人々に伝える事が重要と考えていた。

中学生や高校生など学校団体のプログラムのほか、教員向けのトレーニングも多数行っており、ボーイスカウトのリーダーなどの指導者に対する研修にも力を入れている。中国本土の地方州政府役人への約1週間の研修にも対応しており、宿泊施設も併設されていた。



写真5 マイポ自然保護区の状況 (ツアーガイドのオリエンテーション, 伝統漁業の場 Gei wai)

② ウェットランド・パーク

ウェットランド・パークは、2006年に設置され、10,000㎡もの展示施設も併設されている。2012年の入館者数は44万人で、うち海外からの観光客は37,000人である。湿地や干潟の動植物生体展示のほかに自然系や人文系の展示もある総合博物館である。香港の湿地に特有な動植物を紹介しながら、環境保護や湿地の保全を市民に教育することをミッションとしている。

ガイドツアーに力を入れており、年間3,900以上のガイドツアーが開催され、74,000人が参加していた。来館者自身で見学するよりガイドが解説することで、より効果的に内容を伝えることが大切と考えているとのことであった。野外施設には、湿地やマングローブのある汽水域に木道が設置され、間近に野鳥や植物など自然を観察できるようになっていた。木道には、多くの場所で手すりが設置されていない。これは自然により近づいて親しめることを意識したためとのことであった。安全対策として、監視員が巡回していることと、緊急時用の浮き輪が設置されていた。水位が低いこともあり、現在までに事故はなかったようだ。

野外施設としては、木道の他に「Wetland Discover Center」がある。1日数回のレクチャーや体験教室などが開かれ、魚やカエルなど動物の生体展示もあった。館内には「Swamp Adventure」という子ども専用の展示室が有り、遊びながら湿地について学べる部屋が用意されていた。



写真6 ウェットランド・パークの状況 (Wetland Discover Center)

(2) ロシアのシベリア地域

訪問日：2014年9月22日～27日

訪問先：イルクーツク州立郷土博物館歴史部※☆，イルクーツク市立歴史博物館☆，(イルクーツク)，木造建築博物館タリツィ☆ (イルクーツク州タリツィ)，バイカル博物館※☆ (イルクーツク州リストヴァンカ)，アルセーニエフ記念沿海地方総合博物館※，ウラジオストク海洋水族館※，ウラジオストク要塞博物館※ (ウラジオストク)

訪問者：篠原 徹，戸田 孝 (※の館)

高橋 啓一，藤村 俊樹 (☆の館)

① イルクーツク市内の博物館

イルクーツク州立郷土博物館歴史部は，主にシベリアやアラスカで活躍した探検家に関する資料や先住民に関する資料で展示が構成されている。2階建ての1階部分は，ほとんどがガラス張りのハイケースで陳列された古典的な展示手法である。2階部分は近現代(流刑されたデカプリストなど)の展示になっており，ピアノや家具あるいは衣装を配して生活風景の雰囲気再現しようとしたと思われる展示があるほか，入り口から見て奥にあたる半分は周囲に少数のハイケースの展示を配した講義室のレイアウトになっていた。実際に講演会などの行事を定期的に行っているとのことであるが，通訳案内の関係で詳細を聞き取ることはできなかった。

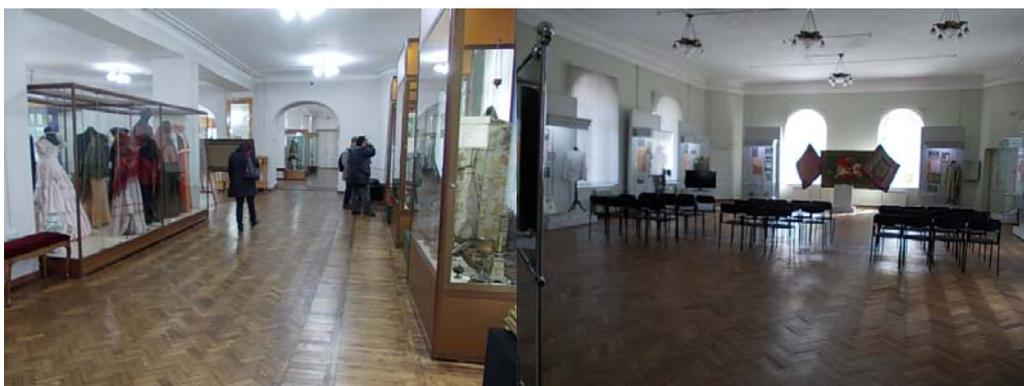


写真7 イルクーツク州立郷土博物館歴史部の状況 (1階展示室，2階講義室)

イルクーツク市立歴史博物館は日程の都合で本館の休館日にしか訪問できなかったが，近隣の分館等(手工業博物館・日常生活博物館・お茶の博物館)を見学することができた。手工業博物館では館長から活動内容についての説明を受けることができ，その際に琵琶湖博物館の「はしかけ制度」について説明したところ，高い関心を寄せたようであった。そのような活動の実績は無いが，今後の可能性として検討していきたいとのことであった。日常生活博物館は19世紀から20世紀にかけての商人の家を再現し，その生活

を展示している。展示解説員も常駐している。お茶の博物館は観光案内所の2階に立地している。かつてお茶の貿易で賑わったというイルクーツクの歴史を説明するために様々なお茶や茶器が展示されていた。



写真8 イルクーツク市立歴史博物館分館等の状況（日常生活博物館，お茶の博物館）

② 木造建築博物館タリツィ

木造建築博物館タリツィはイルクーツク市内からバイカル湖へ向かう途上のアンガラ川沿いに立地している野外博物館である。バイカル湖岸に居住していたブリヤート人やコサックの18世紀～20世紀初頭の農家や教会，あるいはダム建設によって水没したブラーツク，ウスチイリムスク地区の民家が数多く移築されており，当時の人々の生活風景を再現している。説明員が常駐しており，必要に応じて説明してくれる態勢になっている。基本的に移築家屋という展示物の迫力に全面的に依存した展示であり，日本語を含む外国語の案内リーフレットを準備するなどバイカル湖へ向かう観光客を意識した運営になっていた。



写真9 木造建築博物館タリツィの状況

③ バイカル博物館

バイカル博物館はロシア科学アカデミーシベリア支部イルクーツク科学センターに所属する研究機関であって，社会教育機関としての機能も併せ持つ。1階部分が展示室として公開されており，2階および3階に事務機能と研究機能がある構造になっている。但し，2階の階段横にはディスプレイに接続された顕微鏡が多数並んで設置されている *экологический образовательный центр*（生態学教育センター）と称する部屋があり，学級単位などでの実習が行えるようになっていた。イルクーツク市内など近郊からも小学生が来ており，宿泊を伴う4日間のプログラムがあり，湖で自ら採取してきた生物を観察したりすることである。当日は数十名の小学生が来ていて，グループに別れて交替で顕微鏡実習や展示見学を行っていた。

展示内容は前半が湖の自然に関する学術的な展示で，後半が水族展示になっている。決して広くないスペースに充実した内容を配した展示であり，また専門的知識をもった解説員が定期的に解説ツアーを行う体制も整えられていた。

なお，潜水艦による湖底探査を疑似体験できる映像空間があるようであるが，小学生の団体が利用して

いたため、実際にその内容を見ることはできなかった。

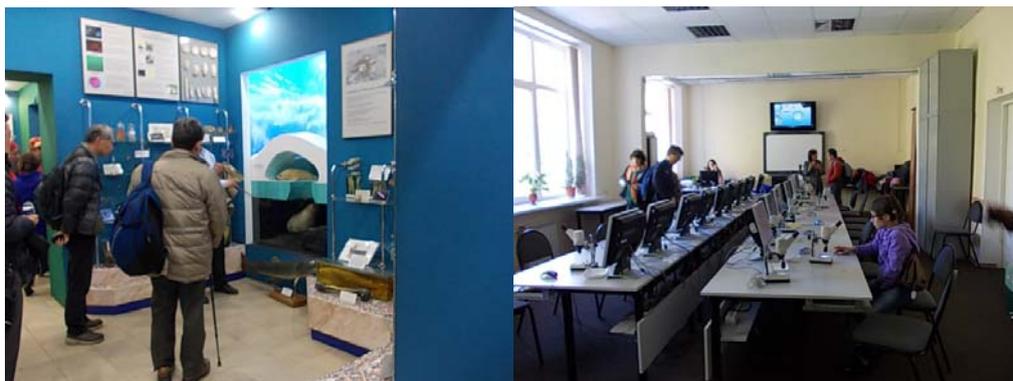


写真 10 バイカル博物館の状況（展示室，生態学教育センター）

④ ウラジオストク市内の博物館

アルセーニエフ記念博物館（アルセーニエフ記念郷土誌博物館とも呼ばれる）はウラジオストク市内中心部にある。沿海地方の自然史や歴史を扱っており、展示手法上の工夫が随所に見られるが、展示構成は極めて古典的かつ正統的である。1階の自然史展示はジオラマを徹底的に剥製で構成したものを中心としており、動物の大きさも相まって迫力満点である。自然史展示の一角に何故か女真の遺跡が展示されていた。考古展示室の遺物展示の横ではスケール感的に違和感があるからであろうか。

2階は歴史展示であり、考古学資料や先住民族に関する資料を古典的な手法で扱っていた。考古展示の中にオーディオセットを隠しもせず置いて環境音楽を流していたのは国民性の違いであろうか。

3階には近代史を扱っており、革命戦争や世界大戦に関する資料が中心である。割れたガラス窓をイメージした壁や軍需物資輸送用の箱を乱雑に積み重ねたところに映像を投影したり、古い商店に普通に置いてあった容器等を並べて各々何を売っていたか考えさせる展示など、細部の工夫は種々見られたが、全体構成は古典的であった。

階段の壁に企画展示のポスターが並べて貼ってあったが、それに関してチラシ等はないとのこと。館内でレクチャーらしき行事が行われていたが、専門家による会議とのことであった。十分な聞き取りはできなかったが、一般利用者向けの行事は無さそうであった。



写真 11 アルセーニエフ記念博物館の状況（1階自然史展示，3階近代史展示）

ウラジオストク海洋水族館は市内中心部に近い海岸にあり、近隣には総合スポーツ施設もあって、その整備に際して目の海が「スポーツ湾」と名付けられている。1階は全体に暗く設定された水族展示であり、巨大水槽の周囲に小水槽を並べた空間に、そこへの導入部分が追加された構造になっていた。亀の水槽で上陸させる島が浮島になっていて水槽内を動き回るのが印象的であったが、他に特に気になる展示手法はなかった。巨大水槽直上の2階部分は自然史展示になっていて、海洋生物が中心であるが鉱物等の展示もあった。

ガイドツアーやイベントが無いか尋ねてみたが無いとのこと。館内の空間を利用して数人の年少児童を相手に図形の授業らしきことをしているグループがあったが、館関係者では無さそうであった。



写真12 ウラジオストク海洋水族館の状況（1階水族展示，2階自然史展示）

ウラジオストク要塞博物館は海洋水族館に隣接している。かつて使われていた要塞をそのまま転用して博物館にしたもので、トーチカの中が展示室になっていて当時の武器や装備品あるいは地図などが展示されていた。最後にはかつての街の様子や地元民族の伝統的武器などの民俗的展示もあった。周囲には高射砲やミサイルなどが置かれており、要塞自体も含めた実物の迫力で全てを語る展示であった。券売担当者以外に人影は無く、特にガイドツアー等を行っている様子は無かった。



写真13 ウラジオストク要塞博物館の状況

（3） 韓国

訪問日：2014年9月28日～29日

訪問先：西大門自然史博物館，63シーワールド（ソウル），アクアプラネットー山（イルサン）（高陽（コヤン））

訪問者：篠原 徹，戸田 孝

① 西大門自然史博物館

西大門自然史博物館は市内中心部に隣接する領域を占める西大門（ソデムン）区の区役所に隣接する場所にある。韓国で初めて「自然史博物館」を名乗った博物館で、開館から12年を経過しているとのこと。対象を小学生に絞った展示構成としており、入館したらまず3階へ登り、順に1階まで降りてくる動線になっている。3階で地球の誕生から始まる非生物的な地学分野を扱い、2階では生命の進化と多様性の発展、1階で生物と人間との関わりという観点で自然の恵み・現在の生態系・環境保全を扱っている。地下には団体用昼食スペースや教育プログラムのための部屋がある。また、2階に企画展示室があり、訪問時には「海に戻った哺乳類」の企画展を実施していた。企画展は夏休みから冬休みまでというスケジュールが基本とのことである。他の時期には特別展と称して標本展を行っているようである。企画展示室の入口前では有

料の体験プログラムを行っており、訪問時には年度で化石レプリカを作っていた。

収蔵空間や資料整理空間も見学した。収蔵庫は奥に扉を設けて、その奥に液浸資料を置く構造になっている。収蔵棚は扉の代わりに手動シャッターがついたものを多用していたが、既成の事務用品を流用した結果だとのことである。

年間予算は人件費を含めて25億ウォンで、うち10億ウォンを入館料収入で賄い、残りは区の予算からの持ち出しとなる。年間来館者は約36万人で、教育プログラム(約60種)を利用する小学生が年間1300人。学芸員は5名在籍している。

ボランティアガイドが館内で活動している。誘導案内などの運営補助を行う一般ボランティア約60名は主に西大門区内の住民であるが、展示解説ボランティア約35名はソウル市外も含めた広い範囲から参集しているとのことである。展示解説は1日3回実施している。展示解説ボランティアには月1回の定例会合があり、講師を呼んでの学習活動などもしているが、基本的に館主催で行っているようである。ボランティアには交通費および食費として1回あたり8000ウォンが支給されるとのことである。毎年5名程度はメンバーが入れ替わるとのことである。

成人のボランティアとは別に小中学生の展示解説ボランティアも居る。校外での学習活動として認定される制度があるとのことである。小学校4年生以上の希望者から60名を選抜し、6週間の研修を経て3年間にわたって月1回以上活動する。原則として高校生になると辞めるが、続ける余地は残っており、10名程度は残っているとのことである。

展示内容には以下のような特徴があった。

- ・入口にドングリの形をした顔出し看板があった。過去の企画展で製作したものであるという。顔出し看板は日本では珍しくもないが、立体的なものは少ないであろう。
- ・3階のバルコニー部分に恐竜などの再現模型がある屋上展示がある。割れた卵の形をしたベンチもあり人気コーナーであるが、隣接アパートに直面する位置にあり、騒音対策のためボランティアが人数制限を行っていた。
- ・出張展示用の移動展示キットを常設展示室でも活用し、その部分は定期的に展示替が為される形になっていた。その中に匂いの展示があり、移動展示なので使うごとに匂いの元を補充する運用体制になっていた。
- ・動物園で死んだ動物の剥製を適宜利用している。象の剥製は2階展示室の看板代わりにになっていた。
- ・CG合成を多用していた。恐竜の尾の動きを解説する映像は受像機自体を動かすと視角が変わる機構になって子供たちが操作していた。骨格標本にCG再現を重ねる展示もあったが、その中に自分が映ろうとする来館者が多かった。来館者を撮影した目前に映写して、その中にCGの動物をうろつかせる展示もあった。
- ・人間とのかかわりを扱う1階展示室はタッチングプールを中に組み込んでおり、装着済の標本を観察できる顕微鏡も置かれていた。昆虫などの鳴き声をする巨大模型や、植物命名の元になった動物等との並列展示も印象的であった。
- ・企画展の人気コーナーを判断するためにガラス面の手や鼻の跡がどこについているかを観察しているとのことである。
- ・来館者が帰宅後に描いた絵を送付してもらって展示するコーナーがあった。イベントで集中した場合などを除いて基本的には全員分を展示しており、2~3ヶ月ごとの入れ替えになるとのことである。



写真 14 西大門自然史博物館の状況（有料体験プログラム，展示解説ボランティア）

② 63 シーワールド

63 シーワールドはソウル市中心部の永登浦（ヨンドンポ）区に属する汝矣島（ヨイド）（漢江の左岸にくっついて存在している島で国会議事堂や証券取引所がある）にある，2002 年まで韓国一の高層建築であった 63 ビル（63 階建ての意味）の 1 階および地階に所在する。ここでは琵琶湖博物館で計画しているバイカルアザラシを飼育しているのので，その状況視察を主目的として訪問した。

中へ入ると，いきなりバイカルアザラシとペンギンが居る。低温に保つ必要のある水槽を固めたという建築構造上の都合もあるが，目玉展示を最初に持ってくるということでもある。水槽の直前には壁に撮影用の背景を描いた空間もあり，日曜日ということもあって館側のスタッフが次々と希望する来館者の撮影を行っていた。

特徴的な展示としては，カワウソの水槽から少し離れたところに円筒形の透明ケースを設置し，水槽との間を円筒形の透明な渡り廊下でつないでいるというものがあった。円筒形ケースには来館者代表（クイズ正解者など）などが餌を入れるための口があり，それを求めて渡ってくる様子が観察できる仕掛けである。



写真 15 63 シーワールドの状況（アザラシ水槽，カワウソ水槽）

② アクアプラネットー山

アクアプラネットー山（イルサン）はソウル特別市の北西に位置する高陽（コヤン）市にあり，開発中の新興都市のショッピングセンターに隣接して立地する，訪問した年の 4 月 11 日にオープンした新しい水族館である。63 シーワールドと同じ韓火（ハンファ）グループ（元は軍需産業だが，最近では太陽光発電で有名）のホテル・リゾート部門が運営しており，琵琶湖博物館の水族部門とも親しい日本語に堪能な学芸員が居るため，63 シーワールドも含めた運営の問題を取材するために訪問した。総水量は約 4,200t（63 シーワールドは 1,000t 弱）である。

展示内容はメインとなる大水槽と，それを下から見る事ができるトンネル構造を主体とする，最近の水族館に多い構成になっているが，後半は屋内動物園になっている。当初は展示動線の最初を深海生物と

し、徐々に陸上へ向かう構成としていたが、深海生物ばかりだと暗くて不人気であったため、この構成を部分的に崩さざるを得なくなったとのことである。

大水槽でのマリンショーの他に、7ヶ所ほどで時間を決めて解説を行っている。これはWebでも公開しているが、その標題は「教育プログラム」である。日本ではあまり使わない表現であるが、韓国では「教育」を前面に押し出すことで低年齢層を含む家族連れの集客が図れるという側面があるようである。団体利用に対しては、既定の解説プログラムの時間に合わせて来館するように勧めており、特に団体利用向けの対応はしていないとのことである。

展示解説以外では、大水槽前での音楽会を月1回程度実施している。貸し切り利用の実績は一山では無いが、63シーワールドで年末年始に実績があるとのことである。欧米で多く日本でもある結婚式利用は、韓国の結婚式の形態には合わないため、式とは別に写真撮影の利用があるのみとのことである。

友の会は構想はしているが具体的な計画は無く、ボランティアについては、民間企業での実施に対しての疑義が呈される状況であるため計画していないとのこと。韓国はまだ水族館という文化が若いものであり、企業のメセナ活動としての社会的評価も固まっていないため、社会活動に関してまだまだ自由に動けない部分があるとのことであった。

ミュージアムショップに関して先方の担当者が日本と比較して感じていることは、お菓子など「持ち帰って皆に分ける」種類の土産物が売れないということだという。韓国にはそのような習慣が無いらしい。日本の場合は伊勢参り講などから御土産文化が発展したといわれているので、それに対応する経緯が存在しないのかもしれない。



写真 17 アクアプラネット一山の状況（展示解説を想定したスペース，屋内動物園）

（4） 中国

訪問日：2015年3月23日～25日

訪問先：湖北省博物館，中国科学院水生生物研究所標本館（武漢）

訪問者：篠原 徹，高橋 啓一

① 湖北省博物館

湖北省博物館は1953年に開設された博物館であり、2002年に湖北省文物考古研究所と統合され、2007年には新館が建設された。展示・収蔵物としては旧石器時代から近現代に至る文化財が約20万点ある。この中でも春秋時代の楚の遺跡から出土した曾侯乙墓出土品、郭店楚簡などの異物が中心となっている。

曾侯乙墓は、南北16.5メートル、東西21メートルの大きさを持つ堅穴墓であるが、出土した銅鐘の銘文によって、戦国初期の曾国の、名を「乙」という君主の墓であると判明した。年代は楚の恵王56年（紀元前433年）ごろと推定されている。墓の中から大量の青銅製の礼記をはじめ楽器・兵器・金器・玉器・車馬器・漆器・木器・竹器および竹簡などの文物15404件が発見され、そのうち8件が国宝に指定されている。湖北省博物館でのこれらを、ガラスケースや壁面ケースに収蔵して展示していた。中でも「曾侯乙編チュー」は、大小60個以上の銅製の鐘が組み合わされた楽器であり、大きさと保存性の良さは圧巻であった。展示手法としては、特別な工夫が凝らされていないが、落ち着いた雰囲気の中で、遺物の迫力を

みせることを心掛けた展示で、平日であるにもかかわらず多くの来訪者があった。一方、展示ケースのガラスは汚れている者も見受けられ、日常の展示メンテナンスは充分ではないことが伺われた。ミュージアムショップの商品は、ほぼすべてがオリジナルである点は特筆すべきものであった。入館料は無料である。



写真 18 湖北省博物館の状況（展示室、ミュージアムショップ）

② 水生生物研究所標本館

水生生物研究所標本館は中国科学院水生生物研究所内にある展示施設である。展示物にはシーラカンスやヨウスコウカワイルカを始め、世界的にみても貴重な魚類が展示されていた。しかし、展示物の維持管理状態は良好といえるものではなく、残念であった。研究をどのように公開し、また市民に普及していくかを改めて考えさせる施設であった。入館料は無料である。



写真 19 水生生物研究所標本館の状況

4 まとめ

(1) 欧米の先進事例

イギリスでは、保守党から労働党への政権交替に伴う政府補助金の復活（2001年）以降、博物館が来館者サービスを強く意識するようになった。その結果、極めて多様な事業展開が進んでおり、1つの館の中でも昼間は子供（家族連れ）向け、夜間は大人向けというような形で多様な事業を展開している事例も多々ある。また、資料の整理収集など博物館の裏方を積極的に見せて、その意義を訴える活動も展開されている。

オーストラリアでは成人利用者を意識したインタラクティブな展示事業の展開が進んでおり、ボランティアスタッフの活動場所としても効果的に機能している。対象年齢層別に展示室を分けている事例が多いが、各年齢層が各々にゆっくり落ち着いて利用できることを目指した結果であるらしい。

(2) 近隣諸国の状況

香港では環境学習の先進事例に重点を置いて、屋外展示施設のハードウェア面に関するノウハウや、その施設を利用した活動の運営状況を調査した。児童生徒への直接的な研修活動と並んでリーダー層への研

修を重視したり、ボランティアガイドを育成する活動を通じて効果的な展開を目指したりするなど、単なる一方通行の情報伝達ではない活動展開が見られた。

ロシアのシベリア地域では、展示手法も古典的なものが多く、交流事業はほとんど行っていないか初歩的な段階である。しかし、一部で講演会などの実績を有していたり、当方の交流事業に関する情報に興味を示す館もあつたりするので、これからこのような事業が発展していく可能性が考えられ、将来的な連携の可能性もあるだろう。

韓国では、公立博物館でボランティアが制度化されている例があるなど住民参加の活動が進んでいるが、博物館は「子供の教育のために連れていくところ」というイメージが強く、成人の「自分のための活動」が発展している形跡は無かった。しかし、ボランティアなどで博物館と関わりを持つ活動の実績があるということは、今後の発展の核と成り得るものであるため、それを見据えた連携を進めていく可能性が考えられる。

中国では地方の中心都市から一例をとって視察したが、それ自体が迫力や魅力を有する展示物を扱うことによって集客を確保しているものの、展示手法やその他の博物館活動の工夫によって、その魅力を更に高めていくという努力が払われていない傾向が見受けられた。その中で、オリジナルのミュージアムグッズを展開しているところは特筆に値することであり、今後の発展に向けての礎としていくことが期待できる。

謝辞

本研究は、平成 23 年度文部科学省学芸員在外派遣研修制度、平成 25 年度全国科学博物館協議会海外先進施設調査、および平成 25～27 年度科学研究費助成事業(基盤研究(B))「日本の博物館総合調査研究」(JSPS KAKENHI Grant Number 25282079) によって行われた。

参考文献

- (1) 榊永一宏 (2012) 大英自然史博物館での研修とイギリスの博物館事情, 博物館研究, Vol.47, No.10, pp.22-24
- (2) 榊永一宏 (2014) 最新の環境学習における, 展示・学習プログラムの開発・指導者研修・運営についての事例研究, 全国科学博物館協議会平成 25 年度海外先進施設調査報告, http://jcs.jp/wp-content/uploads/pdf/A-9_榊永一宏.pdf